



図7 第267次調査出土木簡 2:3

いることから、①南限区画施設のたてかえが、平城還都(745)後に行われた朝堂のたてかえに先行して、養老(717~724)、神亀(724~729)頃におこなわれた可能性、②両者とも還都後にたてかえられたが、区画施設には古くに製作され、ストックされていた軒瓦を使用した可能性、③下層朝堂などに葺かれていた古い瓦を再利用した可能性¹⁾、の3つを指摘している。

今回の調査でも南限築地の軒瓦の型式については同様の知見が得られた。さらに、下層から上層へのたてかえの時期に機能していた溝から、養老・神亀頃からあまり時を置かずに廃棄された木簡や、6311A・B-6664D・F型式の軒瓦が出土したのに対し、6225A-6663C型式の軒瓦はほとんど混入していない。このことは前記①の可能性を示唆しよう。ただし、溝出土遺物の年代は溝埋没年の上限に過ぎず、養老・神亀頃に廃棄された木簡が還都後に溝に埋没した可能性も否定できない。また溝出土の軒瓦の解釈も、上層築地の方が上層朝堂よりも先に改作されたことを示すだけで、一連の造営工事の段階差にすぎず、時期の差を示しているのではない可能性もある。今後に課題を残す。

(古尾谷知浩)
註1) 渡辺晃宏(1996)「第二次朝堂院南門の調査」『1995
平城概報』31~38頁

平 城 専 こらむ 檻 ①

	春	夏	秋	冬
考古第1	高妻洋成	加藤真二	小林謙一	白杵勲
考古第2	立木修	玉田芳英	金田明大	川越俊一
考古第3	山崎信二	清野孝之	岩永省三	井上和人
遺構	西山和宏	箱崎和久	浅川滋男	
計測修景	小野健吉	高瀬要一	平澤毅	内田和伸
史料	古尾谷知浩	山下信一郎	渡辺晃宏	館野和己

◆96年度現場班ラインアップ

春の班は、古尾谷知浩総担当、96年4月1日から7月17日まで稼動。夏の班は、箱崎和久総担当、7月1日から10月17日まで。秋の班は、平沢毅総担当、10月1日から97年2月18日まで。冬の班は、1月13日から4月まで調査を行った。このほか、西山、高妻、金田、清野の4名が研修として3ヶ月現場に立った。

古尾谷、箱崎、平澤の3名は95年4月入所組で全員20歳台。もちろん、総担当初体験。ワカサが出た調査だったとの声も。

(K)